

対話する平和ミュージアムへ

きみじま あきひこ
君島 東彦

(国際平和ミュージアム館長)



問いかけひろば ポストイットの壁

国際平和ミュージアムが9月23日にリニューアルオープンして半年が経ちました。NHK、朝日新聞をはじめとするメディアの方々には9月から12月にかけてリニューアルについて丁寧に報じていただき、あつく御礼申し上げます。また、この間、ご来館いただいた見学者の皆様にも御礼申し上げます。

わたしはリニューアルされた国際平和ミュージアムのキーワードは対話であると考えています。平和ミュージアムは平和創造の拠点です。そして平和創造の重要な方法は対話です。わたしは対話する平和ミュージアムをつくりたいと考えています。

リニューアル後の平和ミュージアムでは、展示の全体にわたって、見学者への問いかけが散りばめられています。平和ミュージアムは「1つの正解」を提示するものではありません。見学者に考えてほしいのです。展示場の最後に問いかけひろばというスペースがあります。ここにはタブレットを使ってデータを表示する装置もありますが、見学者のみなさんは小さいメモ（ポストイット）に手書きで感想や意見を書いて、壁に貼り付けていってくれます。わたしはその全体に目を通しました。非常に興味深いです。個々の展示に対する感想というよりも、平和について見学者がどう考えているかが示されています。

ここでいくつかの見学者のコメントを拾ってみます。「即時停戦」（これはガザ危機に対するメッセージでしょうか）。「しっかり納税してそのお金を必要とする人々に分配すること」（富の再分配の必要性を述べた感想が多かったです。いまの競争社会、自己責任論の暴力性、つまり新自由主義的な世界の暴力性を指摘する感想は多いです）。「人は傷つけあうものだ」（なるほど。なぜそうなのでしょう）。「平和を実現させるには力が必要。いまは自衛隊を強化するべき」（確かにそういう考えもありますね。こんど対話しましょう）。「生きてるだけで幸せ」（わたしもそう思います）。これらはほんの一例ですが、

これからも見学者のみなさんの感想・意見を読むこと——見学者のみなさんとの対話——を楽しみにしています。

対話ということであれば、昨年12月23日に平和ミュージアム2階のピースコモンズで開催された「イスラエル／パレスチナ紛争をめぐる学生ピーストーク」について書いておきたいと思います。昨年10月7日以来のハマース等パレスチナ勢力とイスラエル軍との武力紛争は長期にわたるイスラエル・パレスチナ紛争の新段階であり、ガザの人々は人道的危機の状況（ジェノサイド的状況）におかれています。これをうけて国際平和ミュージアムは11月15日に緊急WEBセミナー「ガザでいま何が起きているのか」を開催しました。パレスチナ問題の専門家、パレスチナ支援をしている日本のNGOのスタッフを報告者に招いて、ガザ危機についての理解を深めました。このWEBセミナーには立命館大学の学生が多数参加していましたが、その中に問題意識の鋭い3人の学生がいて、彼女たちのイニシアティブで12月23日の学生ピーストークが実現しました。

当日は、役重善洋氏、ジェリー・ヨコタ氏らの専門家の報告の後、京都在住のイスラエル人、パレスチナ人の双方から報告をしていただきました。参加者は紛争当事者の声を聴いた後、小グループに分かれてディスカッションをしました。この学生ピーストークにはイスラエル人の研究者、大学院生、パレスチナ人の大学院生、米国のユダヤ系学生、それに中国からの留学生、日本人学生等、多様な参加者があり、当初予定の3時間を超えて4時間に及び熱心な議論がなされました。この学生ピーストークはリニューアル後の平和ミュージアムが取り組んだ最初の対話であり、また学生のイニシアティブで始まった企画というところも新たな方向性、可能性を示しているといえます。

ウクライナ戦争、ガザ危機はもちろんわたしたちの重大な関心事ですが、わたしたちにとってより切実な東アジアの国際関係は複雑な状況にあります。東アジア平和対話に取り組むのはわたしたちの責務であると考えます。このような課題も含めて、国際平和ミュージアムは平和創造の拠点としての役割を果たしていきたいと思います。みなさまのご支援をたまわりますように。



12月23日 学生ピーストークディスカッションの様子

日常の中に「戦争」と平和を考える

鳥山 純子 (国際平和ミュージアム 展示セクター長)

私は、「戦争」の話が好きなおもちゃだった。幼い私は毎年夏の戦争特番を楽しみにし、「戦争」をテーマにした映画や物語に強い関心を持っていた。もちろん完全なる反戦支持者だった。「戦争」への関心と、反戦という立場は、私の中ではイコールでつながっていた。絶対に繰り返してはいけない悲劇として、また反面教師として戦争の悲惨さに耳を傾け、凄惨なシーンに涙し、愚行に突き進んだ施政者に怒り蔑みを感じるには、描かれる物語は過酷で壮絶であるほど都合がよかった。

私が当時のままであったなら、リニューアル後の立命館国際平和ミュージアムには失望を覚えたかもしれない。偶然が生死を分けるような戦闘を直接扱う展示の割合は減った。感覚的に恐怖を呼び起こすような展示もない。扱われている事柄の多くは、むしろ日常の延長にある、あるいは日常の内実そのものに関わるものと言えるだろう。

私自身の経験に話を戻したい。「戦争」に多大なる興味を持っていた私は、学校の先生から「戦争」の話を書くのも好きだった。当時はまだ空襲を経験した現役教員も教壇に立っていた。終戦前に若くして教員になった方もいた。当時小学生だった私たちは、学徒動員中に東京大空襲に巻き込まれて九死に一生を得たという話や、防空壕に児童を連れて飛び込まなければならなかったという経験談に息をのみ、目を輝かせて聞き入った。私は、こうした話を聞きながら恐怖を覚え、権力の理不尽さに憤り、そこで命を亡くした人々に涙した。件の教員たちはそんな私を見て、真面目なおもちゃ、素直なおもちゃと私をかわいがってくれた。

ところが私にとって最も身近な戦争経験者であった祖母は、学校の先生がしてくれたようには「戦争」の話をしてくれなかった。とりわけ祖母は「戦争」の話嫌い、夏の戦争特番と一緒に見てはくれなかった。私が水を向けても、「どうしてそんな話を聞きたいの?」とあしらわれた。学校では先生が嬉々として「戦争」の話をするのに、どうしておばあちゃんはその話をしてくれないのだろうか?先生は「戦争」に興味を持つ私を褒めてくれるのに、どうしておばあちゃん私を偉いと言ってくれないのだろうか?祖母のそっけない対応に、私は子どもながらも若干の疑問と不満を抱いていた。



年表展示：1945年～1970年



今振り返れば、私は悪趣味なおもちゃだったのかもしれない。私がやっていたのは、人が巻き込まれたつらい境遇を無理矢理聞き出そうとすることだった。しかも私は、爆撃や空襲警報といった極限状態の話ばかりを聞きかぎっていた。実のところ、祖母はしばしば満州から「内地」に戻る際の苦労話をするのがあった。しかし私はそれを「戦争」の話と捉えていなかった。祖母が一人で子どもや義両親の世話をしなくてはならなかった話や、髪の毛を切って女性かどうかわからなくなったという話は、家族が過去に経験した大変な境遇の話ではあったけれども、私には日常のやりくりにしか聞こえず、物足りなさを感じていた。当時の私には、戦争が日常の中にあること、そしてだからこそ(戦争は日常の性質を変えてしまう)悲劇的なものであることは想像ができなかった。

こうした私の思いこみを、幼さや理解不足のためだと切り捨てることもできるだろう。しかし当時テレビや新聞で私が晒されていた戦争に関する情報の多くも、空爆や虐殺といったセンセーショナルなものだった。私にとって戦争は人殺しと同義であり、戦争の悪質さを理解するのに努力はいらなかった。戦争が人殺しと同義の究極な悪事であれば、平和とはその対極にあった。平和は、こうした単純なロジックの延長線上で考えることができた。平和の実践とは戦争に反対すること以上のものである必要はなかったのだ。しかし平和とはそう簡単なものだろうか。人が他者の尊厳を踏みとじることはそう難しいことではない。そう考えたとき、私たちが直面すべき問題は無限の広がりを見せる。

リニューアル後のミュージアムは、他者の尊厳の否定が場所や時代を問わず、多くの場合は日常生活の延長線上で行われてきたことを教えてくれる。またそれらが時に娯楽や愉しみという形を取ることも。さらには、それに抵抗する人々がいつの時代もいたことも。周囲が他者の抑圧を当たり前のものとするときに、果たして私は抑圧される側の人々の話に耳を傾けることができるだろうか。また自分が虐げられる時にはどこにどう助けを求めたら良いのだろうか。リニューアル後のミュージアムには、「戦争」好きだった当時の私には思いもよらない、こうした広く深い問いがある。



世界に110館以上ある平和博物館の中で、初となる大学立の平和博物館として、1992年5月に設立され、2回目となるリニューアルが2023年9月に完成しました。設立の目的は「大学が果たすべき社会的責任を自覚し、平和創造の主体者を育むため」とされ、平和の記憶と歴史をたどる年表展示と、平和について考え・広め・深めるテーマ展示の2面構成に大幅に改編され、来館者自らが「平和のかけら（ピース）」を見つけ、平和創造への一歩を踏み出していける工夫が施されています。

私たちボランティアガイドには来館者自身の主体的な学習を支援（誘導）する「ファシリテーター」として、来館者の「気付き」を引き出し、『来館者と展示との対話』を促し『来館者同士の対話』を手助けする役割が求められています。以前は、来館者の見学目的と時間に合う展示資料を選択し「これはね・・・」と解説して、「平和を考える」きっかけを提供してきましたが、今後は来館者の行動を見守り、学びを助ける質問をしたり、また質問を受けたりするガイドとなり、「平和のかけら」を見つけようとしている来館者と微妙で絶妙な位置関係（対話）が要求されてきています。来館者が学び・求める内容以外の解説は最小限とし、言葉は少し悪いですが知識の押し売りのようなガイドではなく、簡潔で短時間の対応が重要となります。

今回新しく位置付けられたアテンダーは、来館歓迎の挨拶の中で、平和博物館としての成り立ちと館内施設紹介・見学時の注意事項を説明し、「展示の見方（平和のピースを見つける）」の説明は、地階の「導入シアター」前でを行い、来館者の人数が多い時は、グループに分ける工夫をして対応しています。

来館者との対話の成立がガイド開始の大前提なので、「見ておられるこの資料は何かわかりますか?」「何か質問はないですか?」などと、来館者目線に立った『声かけ』から始め、説明が一方向的でないように常に心がけるようになりました。しかしながら、ガイド自身の思いで解説を始め、来館者が展示と向き合う（対話）の時間を妨げたり、望まれていない内容にまで幅広く解説するなどの様子が少し見られます。

「対話型平和ミュージアム」の『ファシリテーター』として、私たちはまだまだ発展途上で未熟です。これまでのガイド経験を生かし、豊かな知識に基づきながら求められるガイドをめざし、日々研鑽を重ねていきたいと考えています。

（ボランティアガイド：長井 正之）

学生スタッフ 活動記録

学生プロジェクトスタッフ編

私が立命館大学国際平和ミュージアムの学生スタッフに採用され、学生プロジェクト活動に取り組み始めた7月初旬から数えて、半年以上の時間が過ぎました。活動内容は、リニューアルした国際平和ミュージアム、そしてまた私にとっても初めての挑戦が多く、大変刺激的な経験となりました。

私が特に従事した活動は、書籍紹介ポップ作成の学生プロジェクト活動でした。この活動の目的は、リニューアルとともに生まれたピースコモンズという空間を、より有意義なものにすることにあります。ピースコモンズは、平和関連の図書などを所蔵しているメディア資料室とともに、国際平和ミュージアムの2階に位置しており、来館者が見学の前後に学習をして、展示への理解を深めるための場となっています。そして自分たちの役割は、来館者の学習の手助けとなるための書籍を紹介し、その場をより魅力的なものにすることにありました。

こうして学生プロジェクトが始まり、一緒に働くメンバーと今後の活動の流れを決めていく中、他のメンバーからの推薦もあり、私はプロジェクトリーダーという立場を担うこととなりました。リーダーの重責に自分が務まるか不安もありましたが、様々な方から励ましの言葉もあり、プロジェクトを始めました。

こうして始まったプロジェクト活動は当初、取り上げる書籍のテーマや制作方法について中々決まりませんでした。自分自身がこうしたプロジェクトに初めて関わり、どのように運営していくのか手探りの状況にあったためです。しかし、職員さんや他のメンバーからのアドバイスも得て、活動方針も固まってきました。そして、“過



去と未来”というテーマのもと、過去に起きた出来事と、現在ないし未来に向けた課題に関する書籍の紹介をすることとなりました。

こうしてプロジェクト活動は、様々な方々の協力のおかげで進み、“過去と未来”の平和について考えることが出来る、多様な種類の書籍のポップが立ち並びこととなりました。当初は初めての挑戦を前に不安になる事や上手くいかないこともありましたが、プロジェクトメンバーや職員さんの応援もあり、無事活動を続けることが出来ました。今後は、今年度の活動を通して得た知識やスキルを活かして、来館者がより平和について学ぶことが出来るよう、その環境づくりに努力していきたいと思います。

（学生スタッフ：塚本 遼平）

遊心雑記

ウクライナ戦争と腰痛

安齋 育郎 (国際平和ミュージアム名誉館長)

2022年2月24日にウクライナ戦争が始まってから、この戦争の性格や国際社会を飛び回る情報の信憑性について話す機会が増え、2023年4月には、『安齋育郎のウクライナ戦争論』という小冊子を刊行しました。ところがこの冊子、ものすごい普及速度で、1か月1000冊近いペースで注文が来たのです。現在は増補改訂第8版、104頁フルカラー、図版満載で1冊250円の格安価格、注文方法は私へのメール1本、1冊から多い人は100冊~300冊という人まで注文が押し寄せてきました。

この本の特徴は、①ウクライナ戦争は「ロシアによる侵略戦争」ではなく、「アメリカによる世界戦略の一環」であることを歴史的事実を紐解いて解明していること、そして、②「ブチャの大虐殺」や「クラマトルスク駅砲撃事件」などを含めて、欧米発のフェイク・ニュースを徹底的に暴いていることです。読者はマスコミに伝えられている情報との余りの違いに愕然とし、ウクライナ戦争の本質について再考します。

わが家の玄関先にはいつも何百冊かの冊子が置かれ、朝メールを確認して本の注文がある度に梱包し、絵手紙を添えて最寄りの郵便局から発送します。ところがこの本、上質紙で印刷してあることもあって1冊が0.28kg程もあり、10冊、20冊とまとまるととにかく重いのです。これまで6,500冊ぐらい送ったので重さは合計約2トン。これをパートナーの協力を得てせせと郵便局に運んだのですが、結果はちよとした腰痛です。「ウクライナ戦争の本質を見すえて書籍化する知的労働」+「注文者に冊子を送り届ける肉体労働」—この2つがあって初めて私の平和研究者としての営みが完結します。

本の末尾には、“Be a skeptic” (健全な懐疑論者であれ) と書き添えましたが、清濁併せて渦巻く現代の情報化社会では、押し寄せる情報の信憑性を見極めるのはそう簡単ではありません。



発送を待つ『安齋育郎のウクライナ戦争論』

公式 Instagram、はじめました！

新しいアカウントでは、ミュージアムの日常の様子を中心に、スタッフの活動、こぼれ話、などをシェアしております。最新情報や面白ネタを見逃さないよう、ぜひフォローしてくださいね！

Instagram アカウント

rwp_museum_1992

立命館大学 国際平和ミュージアム



楽しいコンテンツと共に、皆さんと繋がれることを楽しみにしています。ぜひお気軽にのぞきにきてください！！

立命館大学国際平和ミュージアムだより

第31巻 第3号 (通巻92号) 2024年3月1日発行

編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL: 075-465-8151/FAX: 075-465-7899

<https://rwp-museum.jp>



立命館大学国際平和ミュージアム
Kyoto Museum for World Peace, Ritsumeikan University



日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE

今後、展示・イベントのご案内、ミュージアムだより等、国際平和ミュージアムより送付をご希望されない場合、また、送付先の住所変更等ございましたら、氏名・団体名、送付先住所、電話番号、FAX番号をご記入の上、国際平和ミュージアム (075-465-7899) へ送信ください。